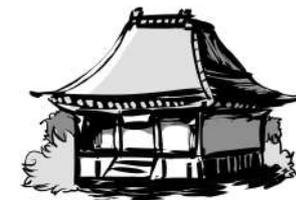


3月7日（土）

西蓮寺 仏教講座





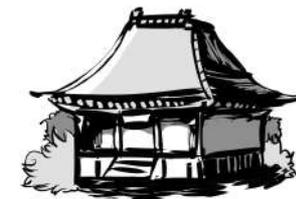
閉じること、直線的人間観の弊害

行く川のながれは絶えずして、しかも本の水にあらず。よどみに
浮ぶうたかたは、かつ消えかつ結びて久しくとゞまることなし。
世の中にある人とすみかと、またかくの如し。

—— 鴨長明



本日のゲスト



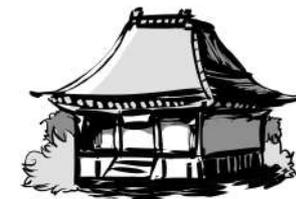
高田 菜美さん

臨床心理士・公認心理師。

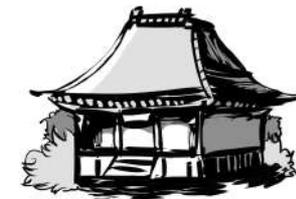
ご専門は臨床心理学や発達心理学。これまで行政機関や大学などで勤務され、現在は精神保健や乳幼児心理学を指導。不登校などの社会的孤立の問題に詳しい「NPO法人寺子屋ひゅっげ」の活動にも従事。以前『i』vol.12「ゆるせる人って、いい人？」に寄稿していただく。動物写真家の岩合光昭や菅原道真公のファン。



「閉じる」を考える



私たちは、長く続いてきたものをどのように「閉じていくか」についての言葉や倫理を十分に持ち得ていないのでは？



高木良子氏 (文化人類学の研究者)

私たちは日頃、無意識のうちに

「人間とは、過去から未来へ文脈を直線的に積み上げ、記憶していく理性的な生き物だ」と思い込んでいる。

だからこそ、その無意識の枠から逸脱する他者を「エラー」や「バグ」とみなし、自分の常識の文脈へ引き戻そうと躍起になる。



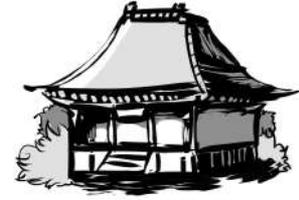
有限性 (narrative)

《有限性》とは、時間、資源、能力、責任など、物事が「**限りある**」状態を指す概念。

人間は必ず死ぬ。 - 中略 - 生老病死が人生において不可避のものであることを常に意識すべきです。死は欲望を空しくし、個人のいさかいに終止符を打ちます。死に対する覚悟は、人を成熟させます。しっかりした宗教は、人間を死と直面させる。まともな文明は、死を見えない彼方に追いやりはしません。

—小松秀樹『医療の限界』新潮新書

無常



かかる諸々の現象は、常に消滅変化を続けて瞬時といえども、とどまることなく、常住のものはない。

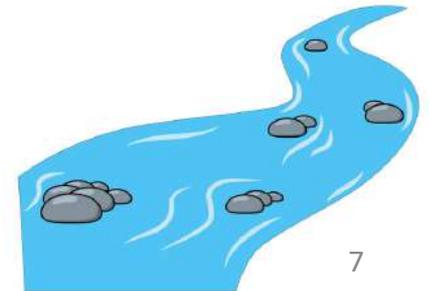


一切の有為現象が、なぜ消滅変化してきわまりないものかといえば、それは原因（因）と条件（縁）とによって生じた結果（果）、すなわち因縁所生なるものだからである。我われは、あるがままに自然界や人間界を観たとき、全てのものが無常であるということは動かすことのできない厳粛な事実であって、何人も否定することのできない道理である。

『仏教要説』本願寺出版（p27）

無常の実践的意味

- 人間の有限性と限定性の自覚
- 人生の非可逆性を知り、寸時の重要性の実感
- すべての所有物に対する執著の心の捨離

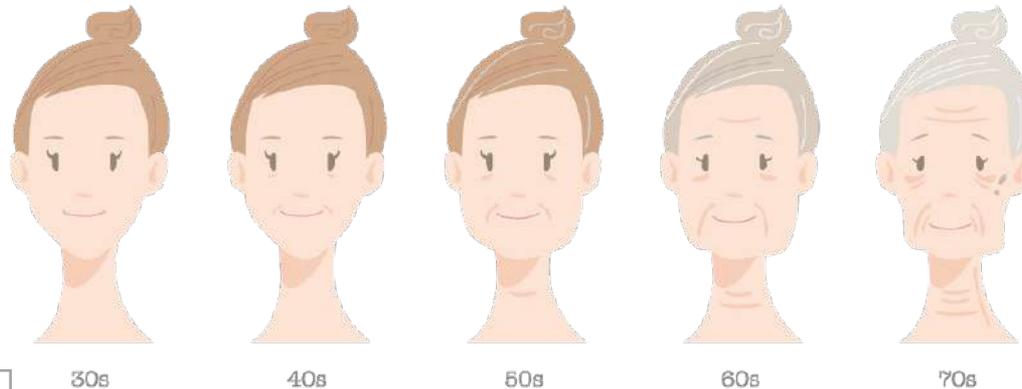


無我



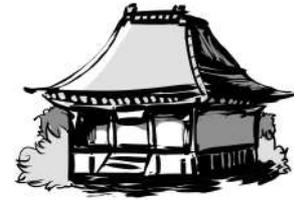
釈尊以前のインドの哲学者たちは、身体や精神は変化するけれども、我われの中には何か永遠に変わらない不生不滅の固定的な実体があるように考え、それをアートマン (atman) と名付けられ、のちに「我」と漢訳された。

『仏教要説』本願寺出版 (p31)



無我の実践的意味

- 無所得
ものごとに執着しないこと。
- 無碍
障碍 (さまたげ) がないということで、自由自在ということ。



ブッダが説いたこと

ワールポラ・ラーフラ 著

今枝由郎 訳



「人間は誰でも、迷宮と異次元でブグになる可能性を秘めている」。スリランカ出身の学者ワールポラ・ラーフラ (1907-97) は、最古の仏典に収められたブグのことばのみに依拠して、仏教の根本的な教義を体系的に説いた。究極真理をめざす実践の本質とは？ 近代精神を意識して書かれた英語圏最良の仏教解説書。1999年刊。



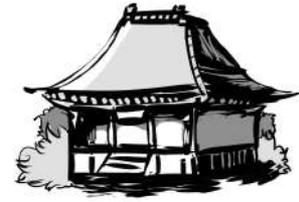
青 3431
岩波文庫

『ブッダが説いたこと』 ワールポラ・ラーフラ著 | 今枝由郎訳

ほとんどすべての宗教は、信仰—それもむしろ盲信といえるもの—に立脚している。しかし仏教で強調されているのは、「見ること」、知ること、理解することであり、信仰ではない。

信仰は、ものごとが見えていない場合に生じるものである。ものごとが見えた瞬間、信仰はなくなる。あなたはそれが見えない以上、私が言ったことが本当かどうか、私のことばを信じるかどうか、という問題が生じる。しかし、私が掌を開き宝石を見せれば、あなたはそれを自分で見ることになり、信じるかどうかという問題は起こらない。それゆえに、古い経典には、こう記してある。「掌の中の宝石を見るように、真実を見よ」

実存は本質に先立つ

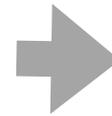


ナイフ形石器／羽曳野市HPより

道具（例：ナイフ）

本質

ものを切る**目的**
(役割)を持つ



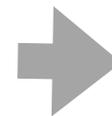
実存

ナイフ（道具）
として**存在**する。

ひと

実存

気づいたときには
既に**存在**していた

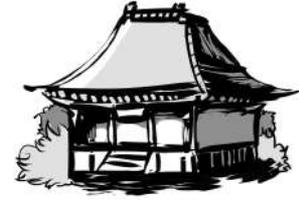


本質

本質が規定
されていない



やる気のない子ども



『おやときどきこども』 寺子屋ネット (学習塾)

大人は子どものやるきのなさを責めがちで、実際に子どもに対して「やる気を出しなさい」と言葉をかける場合さえあります。(中略)やる気は出せと言われて出るものでもありません。

Q 「やる気のない子ども」は存在するのか。

実のところ「〇〇な人」という実体は存在していなくて、ただ単に周囲との関係性や環境から、この人は「こういうふうになった」と考えた方がいいのではないかと思います。

その方が誰も苦しまなくて済むし、自分を含む諸問題を**現象**としてクリアに考えられるのではないのでしょうか。



土井隆義 『キャラ化する／される子どもたち』2012

現代の若者は「一貫した自分（アイデンティティ）」として自分を生きるのではなく、場面ごとに使い分ける「キャラ」として自分を捉えるようになっている。

現代社会では、かつてのように「一貫した自分」を時間をかけて形づくっていくアイデンティティのあり方が弱まり、その代わりに、場面ごとに使い分けられるキャラによって自己や他者を理解する傾向が強まっている。これは単なる流行語の問題ではなく、価値観が多分化し、誰にでも通じる共通の基準や「大きな物語」が失われた社会のなかで生じた、人間関係と自己理解の変化である。

- 外キャラ＝他者との共生のための技法
- 内キャラ＝不安定な社会のなかで自己を支える羅針

キャラ化は、人間を固定的な属性として捉え、成長や変化の可能性を狭める危うさもはらんでいる。つまり筆者は、キャラ化を単純に批判しているのではなく、それを現代社会の条件が生み出した適応のかたちとして描きつつ、その背後にある不安や閉塞も同時に明らかにしている。

キャラを必要とする社会



瀬沼文彰 (社会学者)

自著『キャラ論』 (STUDIO CELLO, 2007) の中で、若者のコミュニケーションにおける「キャラ」を、主に「**集団内での役割**」という観点からさまざまに分類している。(一部抜粋)

- **いじられキャラ**：周囲から突っ込まれたり、からかわれたりすることで笑いや会話のきっかけを作る役割。最もポピュラーで、集団の潤滑油となるキャラです。
- **ボケキャラ / 天然キャラ**：意図的、あるいは無意識に的外れな言動をし、周囲にツッコミを入れさせる役割。
- **クールキャラ**：いつもクールにきめている、かっこつけ
- **ツッコミキャラ / 仕切りキャラ**：周囲の言動を拾って笑いに変えたり、場の進行を管理したりする役割。
- **毒舌キャラ**：本音や厳しい意見をあえて口にする役割。キャラとして確立されることで、角を立てずに本音を言うことが許容されます。
- **癒やし系キャラ**：穏やかな雰囲気場で場を和ませる役割。
- **ヘタレキャラ**：弱気な言動や失敗を晒すことで、周囲に安心感や笑いを与える役割。

終わり



次回

4月4日（土）

9時～11時

毎月・第1土曜日の
午前9時～11時に開講しております。